

日本占領下（1937-1945）の北京における 「知日家」—— 翻訳家銭稻孫と 張我軍を中心に

A sense of tension pervades relations between China and Japan. What do the work and destinies of “those who are knowledgeable about Japan” during the Sino-Japanese War tell us today?

鄒 双双

Zou Shuangshuang

日本学術振興会特別研究員・PD (Japan)

要旨

1937年7月29日、日本軍は北京を攻め落として入城した。それ以後、8年間にもわたって北京は政治、軍事、経済、文化を含むあらゆる面で日本軍の支配下に置かれていた。文教界においては、多くの教育施設の移転や文化人の離散を余儀なくされ、数十年間蓄積してきた新文学の息吹は消えた。その中で各々の事情によって敢えて北京に踏みとどまった文化人もいた。彼らは抗日戦争の勝利までの8年間、自分なりに行き先を模索し、抵抗、沈黙、服従、あるいは協力の姿勢を示し、さまざまな振る舞いを見せた。

本稿では日本支配下の北京に踏みとどまった翻訳家銭稻孫と張我軍を取り上げて検討する。銭稻孫は魯迅とも十数年間の同僚関係を持ち、前世紀初頭から亡くなるまで数十年にわたって翻訳活動を続け、文学をはじめ、歴史、考古、美術、医学といった多分野の翻訳作品を後世に残し、殊に『万葉集』漢訳の先駆者として広く世に認められている。終戦後「文化漢奸」とされた。

一方、張我軍は、台湾新文学運動の開拓者として「台湾の胡適」とされている。数多くの小説を書き残したほか、翻訳にも取り組んでいた。求学で北京に赴いた彼は日本軍の支配に遭遇し、終戦後台湾に引き上げ、文学活動を続けた。本稿では、この時期における二人の言行、特に日本人と深く関連している日本文学の翻訳に着目し、異民族支配下における二人の苦渋、葛藤、そして異なる運命を考え、彼らのアイデンティティーを探ってみる。

キーワード 淪陥下の北京、アイデンティティー、銭稻孫、張我軍

はじめに

グローバリゼーションの進行につれ、日本文学の越境、海外における受容、ひいてはそれにある程度拍車をかけた「世界文学」の形成についての議論や、検証が目立つようになった。おそらく日本のみならず、ほかの国々にも同様な趨勢が見受けられるであろう。「越境」や、「受容」、特に「世界文学」が成り立つ上では、翻訳という営為が非常に重要な役割を果たしていることは言うまでもないことであ

る。優れた作品がより多くの人々に読まれ、共感されることができ、さらに作品を通して異文化が理解されるといった点から言えば、翻訳は素晴らしい作業と目されるに違いない。しかしながら、国家関係が戦争というような非常に険悪な状態にある時に、翻訳の持つ意味が文化交流なのか、それとも相手国の文化宣揚なのかについては、判断しかねる。

そこで、山本亮介氏が「翻訳テキストの意味生成には、その発表、出版に関わるさまざまな要素が作用することになる。日本文学の翻訳についても、原

文と訳文の比較対象のみならず、その経緯や諸種のパラテキストを視野に入れた検証が必要となるだろう¹⁾とし、翻訳の経緯に対する考察の重要性を説いている。ところが、翻訳をめぐる進められてきた従来の研究では、翻訳が生み出した成果である訳本に注目したものが多く、訳本の成立経緯や、翻訳の主体である翻訳者に目を向けたものが少なかった。

本稿では日本に占領された時期、いわゆる「瀾^{らん}陥^{かん}」時期（1937年7月–1945年8月）の北京にいた銭稻孫（1887–1966）と張我軍（1902–1955）という二人の翻訳家に着目する。銭稻孫は20世紀の中国における素晴らしい日本文学翻訳家だ²⁾と評価されており、とりわけ『万葉集』の中国語訳においての貢献が大きかった。張我軍は北京文壇で活躍したゆえ、洪炎秋（1902–1980）、張深切（1904–1956）と共に「台湾作家三銃士」と称されている³⁾。筆者はここ数年銭稻孫について調べてきたが⁴⁾、本稿はこれまでの研究を踏まえつつ二人を比較し、戦中の翻訳活動から戦後の運命まで、二人の相違を確認しながら、今日の私たちにどのような示唆を与えてくれるのかについて考える。

1 故郷より北京へ

銭稻孫は1887年に中国浙江省帰安県（現湖州市呉興県）に生まれる。父銭洵はロシアや日本、西欧諸国に滞在したことがある外交官で、母単士厘は夫に随行して各国を巡遊し、近代的な識見を備えた女性先駆者の一人としていまなお高く評価されている。銭稻孫は1900年に来日して7年間留学し、その後イタリアやベルギーに渡り、4年間遊学する。帰国後、蔡元培の知遇を得て中華民国の教育部に勤務することになり⁵⁾、それによって北京に定住し始める。1927年、銭稻孫は教育部の仕事を辞し、清華大学の専任講師に就き、日本語、日本歴史などの授業を受け持つようになる。それから日中戦争が勃発するまで清華大学で教鞭を執りながら美術、医

学、西洋文学、歴史学といった多岐にわたる分野のものを翻訳する。

今日、銭稻孫は主に日本文学翻訳という領域で評価を得ているが、戦前、彼はほとんど日本文学を手掛けなかった。が、公用もしくは私用で幾度か日本に渡航し、日本学術界と深い関係を持ち、岩波茂雄を筆頭に多くの文化人と交遊を結んだ。それに、当時北京にいた日本人留学生や研究者の世話役として日本人の中で人望が厚かった。のち中国研究家になった吉川幸次郎、奥野信太郎も銭家によく出入りしていた⁶⁾。

一方、張我軍は1902年に台湾に生まれる。1924年1月に初めて北京に赴く。わずか十ヵ月の滞在であるが、北京師範大学夜間部で勉強しつつ、北京で繰り広げられている新文学運動より多くの刺激を受ける。1926年6月、夫人を携えて再び北京を訪れる。1929年より北京大学や中国大学の日本語講師を務める。そして、新文学運動に啓発され、1920年代初頭から台湾新文学運動を提唱する。そのために日本文学の受容が重要だと主張し、おのずと日本語を教授し、日本文学作品を紹介、翻訳するようになる⁷⁾。

このように、銭稻孫は仕事の関係で上京したのである。張我軍はと言えば、日本の支配から抜け出すためか、それとも新文学運動を追いかけるためか、はっきり言えないが、少なくとも彼は北京こそ自分が活躍できる舞台だと考えていたであろう。入京理由がそれぞれ違う二人だが、同じ日本語教育者として多かれ少なかれ日本と係わった。その後、日中戦争が勃発し、北京が日本に占領され、二人の境遇はますます似通うようになった。

2 日本軍支配に耐えながらの翻訳活動

1937年7月7日、盧溝橋事件がきっかけで中国と日本は全面開戦した。29日、日本軍は北京に入

城し、直ちに政治、軍事、経済体制の枠組みを確立し、各面で北京を実質支配するようになった⁸⁾。同時に、文教界においても激変が生じて多くの教育施設が奥地に移転し、文学者や教育者も続々と脱出していった。このような変動の中で、銭稲孫も張我軍も北京に踏み止まった。この決断は二人のこれから先の八年間、ひいてはその後の運命に決定的な影響を及ぼした。

二人とも清華大学や北京大学が南方に移転したため失職し、またのち日本によって設置された「国立北京大学」で再び教鞭を執った。うち、銭稲孫は一時学長まで押し上げられた。教育者としてのほか、二人は戦前と変わることなく翻訳活動を続けていた。ただし、時局や環境だけでなく人々の心境まで変わったため、彼らの翻訳活動の持つ意味には吟味されるべき部分も現れた。本章では、戦中の銭稲孫と張我軍の翻訳活動を確認し、翻訳作業を進めていく過程での思惑を探ってみる。

2.1 銭稲孫の翻訳活動—— 山室三良、佐佐木信綱と

日本軍の北京侵入によって日本語教師の仕事を奪われた銭稲孫は新たな働き口を探すことを強いられた。ちょうど9月、日本の「対支文化事業」の一項目として1936年12月に設立された北京近代科学図書館は機関誌『館刊』を発行し始めた。銭稲孫はそれを拠点に翻訳活動を再開した。ただ、これまで翻訳してきた美術、医学、歴史の領域の作品に対し、『館刊』に寄稿したのは日本文学関係の文章であった。彼にその変化をもたらしたのは、実のところ、同図書館の代理館長の山室三良⁹⁾である。別稿¹⁰⁾で図書館の設立過程、山室三良の役割、銭稲孫の参与と活動について論じたが、ここでは山室三良の銭稲孫の翻訳活動への影響を指摘したい。

山室三良は図書館の経営以外に、『館刊』とその後創刊された『書滲』の編集も手がけた。両誌に記載された文芸作品では古代詩歌がとりわけ多かった。そもそも中国哲学と古典文学を専攻している山

室は、中国における日本古典文学の翻訳と受容に関心を持ち、そしてその少なさに失望し、不満を覚えた¹¹⁾。それで「お互にもっと謙虚な気持ちで受けつゝ、与えつゝして行かねばならない」¹²⁾と思い、中国人の日本古典文学に対する認識欠如の現状を改善すべく、『館刊』や『書滲』においては古典文学の中国語訳を多く掲載しようとした。

そこで、彼が見つけた協力者は銭稲孫である。銭稲孫は『館刊』や『書滲』においては中堅の翻訳者で、万葉歌から同時代の小説まで多様なジャンルを扱った。とりわけ日本詩歌訳の数が際立つ。1941年にこれらの詩歌が『日本詩歌選』にまとめられ同図書館より出版された。『日本詩歌選』に附された山室三良の「跋」には、「昭和十二年の六月頃から銭先生に訳していただいた万葉の歌などがつもりつもって相当の数になったので此処に集めて一卷とした」¹³⁾とある。つまり、「日支の文化交渉始つて以来万葉その他日本の詩歌がまとまって中国の人たちに贈られる最初のもの」¹⁴⁾と見なされた『日本詩歌選』は、山室三良の依頼と銭稲孫の尽力あってこそその結実である。

戦中の銭稲孫の翻訳作品を雑誌別に見れば、『館刊』、『書滲』への投稿が最も多かったことがわかる。ジャンル別に見れば、最も力が注がれたのは万葉歌の翻訳である。前に触れたように、銭稲孫が日本文学翻訳家として評価されているのには彼の『万葉集』訳が物を言った。彼には『万葉集』訳をまとめた二冊の著書がある。一つは1959年に日本学術振興会より出版された『漢訳万葉集選』で、これは世に出た最初の『万葉集』の中国語訳本であり、311首の歌を収録した。もう一冊は文潔若¹⁵⁾の編纂で1992年に中国友誼出版公司より出された『万葉集精選』（日本文学名著選訳叢書）であり、690首をまとめた。

『漢訳万葉集選』は戦後の1959年に出版されたものの、翻訳が施されたのは実は戦中であつた。この成書過程と内容については拙論「佐佐木信綱選、銭稲孫訳『漢訳万葉集選』研究」で詳述した。ここ

で論考を進めるために、手短にまとめることにする。

歌人にして万葉研究家の佐佐木信綱は1930年代から『万葉集』の中国語訳を作りたかったが、種々の事情で頓挫した。断念しかけたところ、北京近代科学図書館で確実な翻訳能力を見せた銭稲孫がいることを知り、1940年に中日文化協会からの補助金を報酬として、自らが選定した万葉歌の中国語訳を銭稲孫に委嘱した。そして、参考書を提供したり疑問に回答したりするなどを通し、銭稲孫に協力した。銭稲孫は訳した歌を信綱に送り、漢詩人鈴木虎雄から校閲を受ける。こうして数年間をかけてようやく完訳した万葉歌は、終戦を迎えて通信が途絶えたことによって、とうとう出版に至らなかった。十数年後、二人は連絡を再開し、さらに吉川幸次郎の斡旋で1959年に日本学術振興会より、翻訳原稿を『漢訳万葉集選』として出版させた次第である。ちなみに90年代に出版された『万葉集精選』は、銭稲孫が戦中と戦後に訳した歌を集成したものである。

まとめて言えば、北京近代科学図書館の山室三良は銭稲孫を『館刊』『書滲』に寄稿させたことによって、実質上彼を日本文学翻訳の道に導いた。銭稲孫は両誌での発表や、訳詩集『日本詩歌選』の刊行によって、佐佐木信綱のような万葉研究家に注目され、『万葉集』の中国語訳を依頼され、最終的に『漢訳万葉集選』を出すに至った。その意味では銭稲孫が日本文学翻訳家として成長していく上では、山室三良と佐佐木信綱が大きな影響を与えたと言えるであろう。

2.2 張我軍の翻訳活動——

島崎藤村、武者小路実篤と

北京が占領されて以降、最初に見られる張我軍の翻訳は前述した『館刊』に掲載された「日本の風土与文学」であった。しかも、『館刊』最終号の1939年7月まで、管見の限りでは彼はほかの雑誌に投稿しなかった。張我軍が日中対立の最中にも関

わらず『館刊』への投稿を継続したのは、山室との交誼があったためだと考えられる。西安事件(1936年12月)の後に国民党と共産党が共同抗日することに合意し、全国の反日気運が一層盛り上がった中、山室は自身の安全を懸念し、張我軍に「万一の時は何分頼むよ」と身後のことを頼んだという¹⁶⁾。

『館刊』停刊後、張我軍は主に島崎藤村と武者小路実篤の作品を中心に翻訳した。島崎藤村の作品を手掛けるきっかけについては、張我軍が1943年7月の『芸文雑誌』に発表した『《黎明之前》尚在黎明之前』で回想した。これによれば、戦時中、彼は年々上昇する北京の物価に耐え切れず、途方に暮れて周作人に仕事の斡旋を請ったところ、『夜明け前』を薦められた¹⁷⁾。しかも周作人は訳文を華北編訳館に受け入れてもらうように取り次いでくれた¹⁸⁾。

それで張我軍は1943年12月を限りに完訳させることをめざし、さっそく翻訳に着手し、毎月『国立華北編訳館館刊』に発表した。そして、『夜明け前』を皮切りに張我軍は続々と島崎藤村の他の作品を訳した¹⁹⁾。事実、彼が1943、44年に訳したものでは、藤村の作品が最も多かった。

『夜明け前』以前には、藤村の作品を訳さなかったのに、なぜ愛着するようになったのか。周作人の最初の推薦はもちろん一因ではあるが、ほかに理由がある。まず1942年11月、張我軍が銭稲孫に引率されて東京で開催された第一回大東亜文学者大会に参加し、藤村に会ったことは要因の一つとして見逃せない。これは彼にとって最初、また最後の面会であった。張我軍が『夜明け前』を訳していることを告げると、島崎藤村は「即座同意し、そして誠意をこめて『君がもし疑問に思うところがあれば、遠慮なく僕に聞いてください』と言った」²⁰⁾という。張我軍はその言葉に感激し、その場で、かならず完全訳稿を持って訪問すると約束した。しかし藤村の他界によってとうとう約束を果たすことができなかった。よりによって藤村が亡くなった1943年8月22日は、張我軍が第二回大東亜文学者大会参加のため東京に到着した日でもあったため、その

ショックはなおさら大きかった。

さらに、初対面の時に抱いた好印象、二度目に会えなかった心残りに加えて、中国国内において藤村作品の翻訳が非常に少なかったという状況も²¹⁾、張我軍が藤村作品へ傾倒していく理由と考えられる。裏返して言えば、張我軍は藤村作品の翻訳を大いに推し進めた。

戦時中の張我軍の訳文の中で、藤村作品のほか、武者小路実篤の作品も目を引く。なかんずく、1942年『婦人朝日』に連載された長編小説『暁』（『黎明』と訳された）の翻訳は彼にとっては最も意義深かった。その翻訳経緯をたどるには、彼と武者小路とのふれあいを語るなければならない。

張我軍が以前から武者小路をはじめ、白樺派の作家に対し関心を持ち、作品を通して「武者小路氏と彼の仲間たちは信頼できる。友達として付き合い、もしくは弟子になっても構わない」²²⁾と考え、実篤を敬慕した。1942年の第一回東亜文学者大会の時に、張我軍は実篤と初めて対面した。この数日後、張我軍と武者小路が方紀生の招待宴に同席し、記念の題詞を交換したという。それから翌年4月に武者小路は北京を訪問した時、張我軍は「長年離別した最も親しかった友達、もっとも尊敬する先生を迎える心持で出迎えた」²³⁾。実篤に対する張我軍の敬意には偽りがなかったことが窺える。

『暁』を翻訳する話が切り出されたのは1943年に張我軍が第二回大東亜文学者大会に参加した際に、武者小路実篤の自宅を訪れた時であった。その時、張我軍は武者小路に『暁』を見せられ、その場で翻訳の許可を取り、帰国するや否や翻訳に着手したのである。訳稿は翌年に出来上がり、同年4月に上海太平書局より出版された。出版に際し、張我軍は実篤に「序」を請うて中国語に訳して「原著者序」として付けた。一方、張我軍は「訳者的話」では「彼は始終良心を持って作品を書き、付和して諂う他の作家と一線を画す」²⁴⁾、「僕は彼の作品を確かに愛するが、特に彼の人物を愛する」²⁵⁾と述べた。『暁』が早々と中国語に訳されることができた

のは、訳者張我軍の実篤に対する熱い思いが原動力になったからであろう。

張我軍は『夜明け前』、『暁』以外に、樋口一葉や、徳田秋声、国木田独歩の作品も翻訳したが、ただ作者別で見れば島崎藤村の作品が圧倒的に多かった。情熱度で言えば『暁』を超えたものがないと言える。このような結果は、原作者の知名度と無関係ではないが、張我軍が島崎藤村と武者小路実篤と直接接した上、彼らに励まされていたことにも関連していると言える。

3. 文化交流の促進 vs. 文化侵略への加担

前章第1節では、銭稲孫と山室三良、佐佐木信綱の交遊や、彼らが銭稲孫の翻訳活動に与えた影響を強調した。そして第2節では張我軍と山室三良、島崎藤村、武者小路実篤との個人レベルの接触に焦点を当てながら、戦時中の彼の翻訳活動を述べてきた。共通の特徴として挙げられるのは、日本人との交遊が彼らの翻訳活動の開始、および展開に密接しているところである。

ところが、日本占領下の北京という特異な空間で行われたこれらの翻訳活動や、日本人との交遊は「交流」より、日本の文化宣揚政策の一環に組み込まれ、日本側の関係者に利用されただけの話ではないかと、という疑念も当然浮かび上がる。確かに、銭稲孫と張我軍が活動していた北京近代科学図書館そのものは日本が文化工作の目的で設立した施設であった²⁶⁾。佐佐木信綱に依頼されて万葉歌の翻訳を行った銭稲孫は、直接ではないが、信綱を介して中日文化協会²⁷⁾から高い報酬を得ていた²⁸⁾。中日文化協会は日本政府と汪兆銘政権が結託して大東亜の文化再建や東亜新秩序の建設を目的として設立したものである。そして、前述したとおり、張我軍が戦時中島崎藤村、武者小路実篤の作品を多く翻訳したのは、彼が日本の画策・主催した大東亜文学者大

会で二人と出会ったからである。大東亜文学者大会は周知のとおり、日本の思い上がりで植民地や占領地域から文学者を集め、大東亜文学を唱える会合である。銭稲孫は第一回と第三回、張我軍は第一回と第二回に参加した。また、二人とも日本管製の「北京大学」で教鞭を執っていた。

このような関連性を念頭に置けば、戦時中に行った銭稲孫と張我軍の翻訳活動は日本文化宣揚に加担したと言わざるを得ない。しかし、これは事の一面に過ぎず、彼らを取り巻く環境、彼らの心理をも考慮し、深層にある内情を掘り下げていけば、そう簡単に結論付けられない。銭稲孫と張我軍が北京近代科学図書館の機関誌に投稿したのは、戦前から山室三良との友情があったからである。張我軍が島崎藤村と武者小路実篤の作品を訳したのは、もちろん家計が一因でもあったが、文学者同士の友情と尊敬の念から生まれた結果でもあったと言える。

大東亜文学者大会への参加に至って言えば、銭稲孫は開会式で中国服を着装し、大会で「一視同仁」を力説したこと、そして「互ひに美を見出せ」の発表などは、自民族文化の尊厳を維持しようとしたことを示している。²⁹⁾『英米文化撃滅』など付和雷同した発言も行ったが、中日戦争という不幸な時代の中で、彼は『大東亜文学者大会』という機会を精一杯に利用して文化交流をめぐる具体的な意見を出した」と張欣が指摘したように³⁰⁾、張我軍は否応もなく大東亜文学者大会に行かされたが、文化交流を促進するための機会と捉えた。彼の言動は本来日本が企図した「大東亜共栄圏」を文学面から翼賛するという目的からかけ離れていた。

このように、戦中期において文化交流と文化侵略の境界線が実に不明確であった。いったい翻訳行為は、主体の翻訳者である銭稲孫と張我軍にとって生業の手段のほか、どのような意味を持ったのか。次章、彼らの日本認識を見ることでこの質問を解いてみたい。

4 文化 vs. 政治—— 戦時中の日本認識を通して

1942年、銭稲孫は学校を巣立つ学生に向かって、「東亜文化は本来三本柱から成り立ったのである。一つはインド文化、一つは中国文化、もう一つは日本文化である。(中略) 現在日本の一本のみが健全で強力であり、他の二本はいずれも軟弱であると言わざるを得ない」³¹⁾とのように、日本文化の東亜における重要性を口説いた。その上、中国文化が凋落し、日本文化が発達してきた理由について彼は、中国は西洋文化の吸収に失敗し、日本は固有文化の上に中国文化とインド文化を摂取し、また最近西洋文化を受容したからだ、との考えを示した³²⁾。

このように、銭稲孫は発達した高度の日本文化を認め、それを学生たちに説いた。銭稲孫の日本文化に対する認識は、なにも伝聞や書面で知ったわけではなく、七年間の長きにわたる留学生活と、度々の日本調査によって実感したものである。豊富な日本経験は、抽象的な文化のみならず彼の日本や日本国民に対する認識を深めた。1936年秋、一年間の日本調査を終えての帰国談で、彼は日本の学術講演の活発さ、本の発行数が夥しさ、識字率の高さ、人々の教養の良さを、中国のそういった点の悪さを反省しながら、経験に基づいて語った。特に日本の学術が政治や軍事と絡まない点を強調した³³⁾。また、彼は「誰だって知っているが、我々は本来輝かしくて優れた精神文化を有した。ところが今日になり、教育が頹廢し、道徳が敗壞し、政治学問も昔よりも後退し、外国に遥かに及ばないことを、誰でも自認せざるを得ないだろう」³⁴⁾と語り、中国文化の復興に対する学生の自覚を呼び覚まそうとした。当然、文化の復興には日本を含める外来文化の摂取が必要だ、と銭稲孫は思い知った。

張我軍の日本文化認識は彼が1943年に記した「日本文化的再認識」に克明に表されている。同文では、彼は日中両国の間に文化理解なくしては不便や摩擦が生じかねないと力説し、「これまで両国間

に時折問題が発生した原因はもちろん多いが、日本文化への認識不足も一因として数えられるであろう」³⁵⁾と述べている。

二人の日本認識を確認した後、振り返って彼らの翻訳活動を見れば、銭稲孫と張我軍にとって翻訳は、戦前から続けてきた日本文化の良さを紹介し、吸収する姿勢の現れであった、と言えるであろう。言い換えれば、彼らは実に「知日家」と称されるに値する。

しかし同時に、彼らは中国との連帯感を喪失しなかった。当時北京にいた作家中藺英助は銭稲孫のことを「周作人を支えて荒廃せんとする学問の府を守り、占領者の日本人に対しても凜乎^{りんこ}として齒に衣着せぬ心意気の文人だった」³⁶⁾と回想した。また、目加田誠も「銭稲孫先生のこと」で「日本の軍部などは、チェン氏（銭稲孫—引用者注）をおさえつけようとしたのだ。しかし、チェン氏にしてみれば、日本と親しい自分がこの際出て、日本人の中国文化破壊にたいして身をもって防波堤となろうとしたことはあきらかである。このときにあったチェン氏ほど苦しい表情をしていたことはない」³⁷⁾と記している。つまり、銭稲孫は中国文化を守ろうとして努力した。他方、張我軍は常々杜甫の「春望」を書いたという³⁸⁾。「国破れて山河在り、城春にして草木深し」を詠じた「春望」は、相次いで日本の支配に陥っていった台湾、北京に面した張我軍の心情を何よりの確に言い得ていたであろう。

総じていえば、彼らは日本文化を認め、列強に崖っぷちまで追い込まれて、そこから立ち上がった日本を見習うべきと考えながらも、あくまで中国人としての自覚を堅持しつつあったのである。

5 戦後の運命の行方—— 結びに代えて

以上、銭稲孫と張我軍を並べ合わせて戦時中における彼らの翻訳活動、および日本文化認識を比較し

てみた結果、二人には類似点が多くあったことがわかった。しかし、戦後の運命は大きく異なった。

戦後、銭稲孫は「漢奸裁判」に掛けられ、「文化漢奸」と言い渡されたため、三年間入獄した。出獄後、差別視されながら暮らし、文化大革命が到来する前夜の1966年に、紅衛兵に殴打され、精神的、身体的苦痛に耐えきれず息を引き取った。彼に反して、張我軍は終戦直後に同じく台湾出身の作家鐘理和（1915–1960）に戦時中の活動を「対日協力」と見なされ、厳しく批判された³⁹⁾ものの、1946年に北京を離れ、1948年に台湾に引き揚げたため、「漢奸裁判」から免れて、文化活動を続けた。

そして研究状況と言え、資料があまり残らず、筆者以外にほとんど研究する者がいない銭稲孫に反し、張我軍は息子張光正の編集によって『張我軍選集』（時事出版社、1985年）、『張我軍全集』（台海出版社、2000年）が出版され、研究も進んでいる⁴⁰⁾。彼を「愛国人士」と評するのも主流となった⁴¹⁾。なぜこのような差が生じたのかは私たちに考えさせる。「漢奸裁判」はもちろん一つの要因であるが、終戦以降それぞれが生きた社会環境、資料の有無なども関係していると考えられる。亡き人はもう自らを語れない。後人の私たちは、資料の発掘に努め、時間に埋もれた歴史事実を少しでも解明するように努力することを求められている。銭稲孫と張我軍に代表される日本占領下の北京に置かれた知識人たちが、どのような思惑と姿勢を持ちながら日本支配下で生きていたのかを検討する時に、「漢奸裁判」の判決で判断するのではなく、個別に対する緻密な考察をするうえで、さらに類似した事例や、相違した事例と比較する作業も欠かせないと思われる。こうして初めて検討対象を的確に評することができると思われる。

最後に、山本亮介氏は「〔日本文学の翻訳普及事業は〕満州事変から国連脱退へと向かう時期、対外文化工作の一環として企画され、そこに多くの文学者らが関わることになった。内憂外患期の文化交流、左派退潮期の国際志向、対欧米／対アジアの非

対称性や、海外の諸個人による翻訳活動、現役作家らの対外翻訳意識など、昭和戦前・戦中期の日本文学翻訳の取り組みからは、現在のそれを照射するさまざまな観点が得られるはずである⁴²⁾と述べたことがある。文学作品が日々かつてない速度で外国語に翻訳され、世界中の人々を楽しませている現在にいながらにして、私たちは戦前、戦中の翻訳事業からどのような視点が得られるであろうか。

さまざまな解釈が可能なため、言い尽くせないが、本稿で考察した銭稲孫と張我軍の事績から言えば、二点が言えるであろう。まず、戦争時代の中間人物たちを置き去りにせず真摯な態度で扱わなければならないことである。それから、銭稲孫と張我軍のように、たとえ国家関係が望ましくない時にあっても、国籍、国家関係を越えての交流を望めば、不可能ではない。そのために、まず「政治」と「文化」、「政府」と「人民」の区別を見分けなければならないことであろう。

注記

- 1) 山本亮介「日本文学の翻訳出版をめぐって—昭和戦前・戦中期の意味に触れつつ」昭和文学会『昭和文学研究』第65集、2012年9月、122頁。
- 2) 查明建、謝天振『中国二〇世紀外国文学翻訳史（上巻）』、湖北教育出版社、2007年、745頁。
- 3) 秦賢次「台湾新文学運動的奠基者」『中国現代文学研究叢刊』1990年第3期、236頁。
- 4) 銭稲孫については「佐佐木信綱選、銭稲孫訳『漢訳万葉集選』研究」（『東アジア文化交渉研究』第4号、2011年3月）、「銭稲孫訳一九五九年版『漢訳万葉集選』の成立経緯—佐佐木信綱宛銭稲孫未発表書簡十二通、鈴木虎雄書簡一通」（関西大学国文学会学会誌『国文学』第95号、2011年3月）、主に銭稲孫の「文化漢奸」を再検討した「日本占領下の北京における文化人—銭稲孫と周作人を中心に」（ICIS次世代国際学術フォーラムシリーズ第四輯『近代世界の「言説」と「意象』』、2012年2月）、「三〇年代の北京における銭稲孫像—日本人留学生の目を通して」（『東アジア文化交渉研究』第5号、2012年2月）、「日本占領下の北京における日中文学交流—北京近代科学図書館という場において」（日韓次世代学術フォーラム『次世代人文社会研究』第8号、2012年2月）、「翻訳家銭稲孫と日本人との交遊—谷崎潤一郎と岩波茂雄を中心に」（関西

大学国文学会学会誌『国文学』第96号、2012年3月）がある。

- 5) 銭稲孫「訪問銭稲孫記録」、『魯迅研究資料』第四輯、天津人民出版社、1980年版、199頁。
- 6) 前掲拙論「三〇年代の北京における銭稲孫像—日本人留学生の目を通して」。
- 7) 「年譜」、張光正編『張我軍全集』、台海出版社、2000年を参照。
- 8) 郭廷以編『中華民國史事日誌』（第3冊）（中央研究院近代史研究所、1984年）を参照。
- 9) 山室三良は1905年に長野県佐久市に生まれ、1933年に九州帝国大学法学部を卒業する。北京に留学し、国立清華大学大学院に入る。36年に外務省の委嘱により北京近代科学図書館の創立を担当し、館長に任命される。46年に日本に引き揚げ、九州大学で助教授、教授を務める。
- 10) 前掲「日本占領下の北京における日中文学交流—北京近代科学図書館という場において」
- 11) 山室三良「一つの手紙」、『書滲』第29号、1941年5月、5頁。
- 12) 前掲山室三良「一つの手紙」、6頁。
- 13) 山室三良「跋」、『日本詩歌選』、北京近代科学図書館、1941年。
- 14) 「雑報」、『書滲』第29号、1941年5月、3頁。
- 15) 1927年生まれ、翻訳家。中国作家、ジャーナリスト蕭乾の妻。晩年の銭稲孫に日本語を教わりながら翻訳を手伝った。
- 16) 聞き手：阿部洋「山室三良氏インタビュー記録」、『インタビュー記録 E-四 特定研究「文化摩擦」』、東京大学教養学部国際関係論研究室、1980年、21頁。
- 17) 周作人は1934年秋東京に行く際、中国文学会の発足を記念して竹内好らに招待された席で島崎藤村と初めて会った。その二週間後、また藤村に招宴され、徐祖正、和辻哲郎、有島生馬を含めて五人で歓談し、藤村から岡倉覚三著『茶の本』を貰ったという。（周作人「島崎藤村先生」、『芸文雑誌』第1巻第4巻、1943年10月）
- 18) 張我軍「《黎明之前》尚在黎明之前」、『芸文雑誌』第1巻第3期、1943年9月、28-29頁。
- 19) 「常青樹」（原名「並木」、『中国留日同学会季刊』第4号、1943年）、「秋風之歌」（原名「秋風の歌」、『中国留日同学会季刊』第5号、1943年）、「凄風」（原名「嵐」、『日本研究』第1巻第2、3、4期、1943年）、「分配」（『日本研究』第2巻第4、5期、1944年）、「灯光」（『藝文雑誌』第2巻第7、8期、1944年）などの藤村作品の翻訳が確認される。
- 20) 張我軍「關於島崎藤村」、『日本研究』第1巻第2期、1943年10月、111頁。

- 21) 管見の限りでは、張我軍の翻訳以前に、徐祖正訳、北新書局 1927 年 12 月出版の『新生』と、羅洪訳、開華書局 1934 年および上海：中学生書局 1935 年 6 月再版の『新生』のほか、いくつかの短篇しかなかった。
- 22) 張我軍「武者小路実篤印象記」、『芸文雑誌』第 1 巻第 2 期、1943 年 8 月、16 頁。
- 23) 同上、17 頁。
- 24) 張我軍「訳者的話」、前掲『張我軍全集』、427 頁。
- 25) 同上、428 頁。
- 26) 岡村敬二「北京近代科学図書館の〈日本〉」（『国際日本文化研究紀要』第 7 号、1992 年 9 月）、小黒浩司「北京近代科学図書館史の研究 1、2」（『図書館学会年報』第 33 巻第 3、4、1987 年）参照。
- 27) 叶美霞「『中日文化協会』述評」（『民国档案』、2000 年 3 月）を参照。
- 28) 前掲拙論「『佐佐木信綱選、銭稲孫訳『漢訳万葉集選』研究』を参照されたい。
- 29) 前掲拙論「日本占領下の北京における文化人—銭稲孫と周作人を中心に」を参照されたい。
- 30) 張欣「中国人作家の“帝国”東京体験—張我軍と『大東亜文学者大会』」、『アジア遊学』第 13 号、2000 年 2 月、109 頁。
- 31) 銭稲孫「在学園門口的臨別贈言」、『中和月刊』第 3 巻第 8 期、1942 年 8 月、14 頁。
- 32) 同上。
- 33) 銭稲孫「東游帰国一夕談」、『書人』、1937 年第 2 号、70 頁。
- 34) 前掲銭稲孫「在学園門口的臨別贈言」、13 頁。
- 35) 張我軍「日本文化的再認識」、『日本研究』第 2 巻第 2 期、1944 年 2 月、42 頁。
- 36) 中藺英助「過去に迫られる日々」、同『わが北京留恋の記』、岩波書店、1994 年、105 頁。
- 37) 目加田誠「銭稲孫先生のこと」、『目加田誠著作集八』、龍溪書舎、1986 年、123 頁。
- 38) 張光正「『張我軍選集』編者後記」、前掲『張我軍全集』、547 頁。
- 39) 鐘理和『鐘理和日記』、鐘理和文教基金会、1996 年、37-38 頁。
- 40) 徐紀陽「張我軍的翻訳活動与“五四”思潮」—兼論与魯迅、周作人之關係」（『瀋陽師範大学学报（社会科学版）』2011 年第 6 期）、王昇遠、周慶玲「中国日語教育史視与閩中的張我軍論」（『台湾研究集刊』、2009 年第 3 期）、前掲張欣「中国人作家の“帝国”東京体験—張我軍と『大東亜文学者大会』」、そして田建民『張我軍評伝』（作家出版社、2006 年）がある。
- 41) 例えば、前掲田建民『張我軍評伝』。
- 42) 前掲山本亮介「日本文学の翻訳出版をめぐって—昭和戦前・戦中期の意味に触れつつ」、122 頁。